「深夜ファミレス滞在の女神」

古堅元貴

□登場人物

仮男（２６）・・・俳優とバイトの掛け持ち

○代々木上原・カフェ（夜）

０時過ぎ。カフェだがＢａｒカウンターもあり、白を基調としたテーブルはレストランのようにも見える。海外客もおり、約３０席は満席の店内。

仮男（２６）、学生時代の友人Ａ、Ｂ、Ｃとコーヒーを飲みながら話している。

仮男Ｍ「すでに僕の終電がなくなって３０分が経っていた」

楽しそうに話している４人。

仮男Ｍ「彼らにはまだ終電がある」

楽しそうに話している４人。

仮男Ｍ「彼らには妻や恋人がいる」

楽しそうに話している４人。

仮男Ｍ「僕は郊外の実家住みのため、終電が彼らより１時間早い」

○同・店前（深夜１時）

会計が終わり出てくる４人。

友人Ａ「（仮男に）終電ないなら言えよ～」

仮男「今日は逃してもいいと思ったから」

友人Ｂ「どうすんの？」

仮男「下北って近いっけ？」

友人C「２０分くらいで着くよ」
仮男「そしたら下北まで歩いて、ネカフェで泊まるわ」
×　×　×
「うい」、「じゃ」、「また～」と別れ、代々木上原駅へ向かう友人A、B。笹塚方面へ歩いていくC。下北沢方面へ歩いていく仮男。

○道（深夜１時頃）
スマホのGPSを利用しながら、下北沢へ向かっている仮男。
仮男M「下北だと始発は５時過ぎ。あと４時間近く…」
人は全く歩いていない住宅街。路地で立ち止まる仮男。スマホを出し、
仮男M「彼らには、ネカフェで過ごすと言っていたが、僕の気持ちは表向きにはネカフェと口にしていた段階で、別の選択肢が確定していた」
仮男、スマホで「下北　デリヘル　安い」と検索。
×　×　×
さっきの場所から数百m先の路地裏。スマホでクーポン利用で最もお得なデリヘルを探している。手が止まる仮男。
仮男「ここか…？（と呟く）」
スマホ画面には、「快楽速達便　初回お急ぎ便　５０分９，０００円！」のページ。

発信ボタンを押し、お店に電話する仮男。ワンコールで電話は繋がり、

男（電話口）「お電話ありがとうございますー」

仮男「あのー、クーポン見て…」

男（電話口）「どちらのサイトのクーポンですかー？」

仮男「えっと、破格絶頂掲示板ですかね…」

男「破絶のお急ぎ便ですかー？」

仮男「の、初回９０００円のコースって、全部込みでその値段…」

男「ホテル代別ですよー。今どちらいます？」

仮男「今、下北の近くで…」

男「そしたらまずホテル入っていただいて、２０分後とかで大丈夫ですかー」

仮男「あ、すいません、一回考えます」

男「はい、お待ちしてまーす」

電話切れる。

仮男「（考えている）」

×　×　×

さっきの場所から数百ｍ先の路地裏。

仮男「ここか…？（と呟く）」

スマホ画面には、「精夜位痴夜物語　初回第１章一節コース　５０分８，５００円！」のページ。

発信ボタンを押し、お店に電話する仮男。ワンコールで電話は繋がり、

男（電話口）「はいもしもしー」

仮男「すいません、サイト見て５０分８５００円のコースお願い…」

男（電話口）「どこのサイトですかー？」

仮男「えっと、破格絶頂…」
男「破絶ですね、何分後くらいでしょうか？」
仮男「これってホテル代も込みで８５００円ってことですよね…？」
男「そうですよー」
仮男「あ、じゃあお願いします」
男「今どのあたりいますかー」
仮男「もう少しで下北沢駅に着くと思い…」
男「下北？ウチそこはエリアじゃないですよー。ウチ品川にありますからねー」
仮男「え…あ、そうなんですか？」
仮男、スマホの画面を再度確認すると、精夜位痴夜物語は品川エリアと記載されてる。
「すいません」などと言い、電話を切る仮男。
仮男M「なんで下北で検索したのに、品川の出てんだよ…」
目の前に下北沢商店街が現れる。

〇下北沢・ネットカフェ
自動機械で受付をしている仮男。
仮男M「あのあと粘ってもう一店舗に電話をしたが、店舗指定のレンタルルームなら安くご案内できると言われ、さすがに店舗指定のレンタルルームは怖いと思って、諦めた」
仮男、必要事項を記載し、確定ボタンを押すと、「現在満室」の案内表示が出る。

仮男M「満室なら、入力する前に教えてくれ…」

立ち尽くしている仮男。

○下北沢・ファミレス（深夜３時前）

入店する仮男。自動機械で受付し、席を案内される。店内には勉強している２０代女性、また別の席ではうつ伏せで寝ている２０代男性。仮男を含めると、客は店内に３名。

×　×　×

タッチパネルでコーンスープを注文する仮男。スマホで時間を確認すると深夜３時。

仮男M「始発は５時６分。あと２時間か…」

仮男、見渡すと配膳ロボットがうつ伏せ男性のテーブルの前に来て、

配膳ロボット「料理が届いたよ！料理が届いたよ！（と繰り返す）」

しかしうつ伏せ男性は寝ており、気づいてない。

配膳ロボット「料理が届いたよ！料理が届いたよ！（と繰り返す）」

真摯に同じトーンで伝え続ける配膳ロボット。

すると近くの席の２０代女性、参考書にペンを挟んで立ち上がり、配膳ロボットの前に行く。

仮男「？」

女性、配膳ロボットが持ってきたパフ

ェを男性のテーブルにそっと置く。
配膳ロボットの頭をやさしく撫でる女性。「ご注文ありがとうございました！ごゆっくり楽しんで下さい！」と言いながら厨房に戻っていく配膳ロボット。
女性は席に戻り、再び参考書やノートを開いて勉強をする。

仮男M「かっけえ…」

女性、参考書とにらめっこするように悩んで、ペンを動かす。

仮男M「受験生ではない。ちらっと見えた参考書は学校の科目的なものではなかった。そしたら資格とか？就職とか？僕と同じ年か、少し下の年齢かな？荷物はリュック一つ。僕と同じく終電を逃したのか？それともこの時間にこの場所で勉強するのが彼女のルーティーンなのか？」

時折、息抜きなのか、文庫本を読む女性。

仮男M「今日はここで正解だった気がした」

仮男、彼女に感化され、バッグから演技メソッドの本を取り出し、読み始める。

×　×　×

5分後。

本を枕にし、うつ伏せで寝ている仮男。
うつ伏せで寝ている２０代男性。勉強している２０代女性。

×　×　×

１０分後。
うつ伏せで寝ている仮男。パフェを食べている２０代男性。勉強している２０代女性。

×　　×　　×

１時間半後。

仮男「おお…ウァア～（と伸びをし、起きる）」
目をこすり、周囲を見渡すと客席には誰もいない。２０代男性の席には食べ終わったパフェの皿。
仮男、スマホで時間を見ると「５時１６分」。
仮男Ｍ「始発逃した…」

○下北沢駅・改札口（朝）
駅前にはさよならが名残惜しいのか、改札前で喋っている男女グループがいくつも。
仮男「（それを見て微笑ましくなる）」
改札口に入っていく仮男。

おわり